

災害ボランティアのすすめ

阪神・淡路大震災では、地震発生直後からの1年間に、延べ137万人以上が被災地で活動し、1995（平成7）年は「ボランティア元年」と言われています。

しかし、災害ボランティアとして自然災害が起きた場所に行くことは危険が伴う行為であり、準備なしに参加できるものではありません。災害ボランティアの活動や心がけについて考えてみましょう。

1. 災害ボランティアを始めるにあたって「参加前に情報収集を」

大きな災害が発生したとき、被災地でボランティア活動をして、被災地の方々の役に立ちたいと思う人は少なくないでしょう。

そんなときは、まず、被害の状況はどうか、被災地ではどのような支援が必要とされているか、ボランティア活動へのニーズはあるかなどについて、正確な情報を把握することが重要です。

こうした情報は、テレビやラジオ、新聞、地方公共団体のホームページなど、信頼できる情報源から収集しましょう。被災地に直接電話で問い合わせるのは、現地の人たちの労力を増し、電話回線の負荷を増やすことになりかねないので避けましょう。

また、ボランティア活動をしたい人たちに突然駆けつけられても、被災地ではかえって混乱してしまう場合があります。多くの場合、ボランティア活動を受け入れる体制が整い次第、被災地で、ボランティア活動の調整を行う「災害ボランティアセンター」が設置されます。ここが窓口となり、さまざまな種類のボランティア活動が行われます。ボランティア活動に参加したいという人は、まず、災害ボランティアセンターのホームページを調べてみましょう。災害ボランティアセンターのホームページがない場合は、都道府県庁や都道府県社会福祉協議会のホームページを調べてみましょう。

被災地では、自分のことは自分ですることが基本です。被災地でのボランティア活動のために行った本人が、助けられる側になったり、被災地の負担になったりしては本末転倒です。食事や就寝場所・交通費の確保、体調管理なども含め、情報を収集し、万全の準備をして活動に参加しましょう。

（出典：政府広報オンライン）



被災地をみる高校生ボランティア（県立舞子高等学校）

社会福祉協議会

1995（平成7）年1月17日の阪神・淡路大震災。被災地には世界や日本全国からさまざまな支援がよせられました。ボランティア参加者の約7割がボランティア未経験で、5割以上が20代以下という若年層でした。ボランティアの経験のない若者が多数を占めたことから、ボランティアの「善意」を被災地のニーズにつなげていくための「しくみ」が十分でないことが判明し、災害ボランティアのネットワークの必要性が高まりました。こうして、阪神・淡路大震災以降、被災地の「社会福祉協議会」がボランティアのニーズを集め、調整を図るようになりました。

ひょうごボランティアプラザ

ひょうごボランティアプラザは、社会福祉協議会が運営するボランティア活動の全体的な支援拠点です。また、兵庫県内のすべての市区町社会福祉協議会にはボランティアセンターが設置され、ボランティアの相談や登録などを行っています。

【連絡先】ひょうごボランティアプラザ
〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-1-3
神戸クリスタルタワー6階
TEL: (078) 360-8845
FAX: (078) 360-8848
URL <http://www.hyogo-vplaza.jp/>

2. 被災地へのボランティア活動に行く前に「事前学習」

初めて被災地でボランティア活動を行う場合、何をどうすればいいのか、被災者の方々とどのように接すればいいのかなど、不安を持っている人がいるかもしれません。

そのためにも、ボランティア活動とはどのような活動なのか、ボランティアの心構え等を事前に学習しておくことが大切です。

以下は、県内の高校で、実際に使用された事前学習用の資料の一部です。

〔心得〕

- (1) 災害支援が目的。まず、与えられた仕事を丁寧にきちんとこなすこと。
- (2) 被災地を見てみたいとか、何かをして満足したいという気持ちは、心の中にしまっておくこと。

〔活動時の留意事項〕

- (1) 「ボランティアをしてあげている」ではなく、「ボランティアをさせてもらっている」という気持ちが大切。難しいかもしれないが、この言葉はいつも噛み締めていて欲しい。
- (2) 絶えず周囲に気を配り、指示されるまで待つのではなく、自分から進んで仕事を探すなどの積極性が欲しい。
- (3) 活動時間は、ボランティアを受け入れているボランティアセンターが決めた時間を守る。原則的には、午前9時か午前10時に始まり、1時間の昼休みを挟んで、午後4時頃終了する。これは、現地の皆さんの生活時間を守るためである。外部から入るボランティアは3日から5日程度しか活動しないので、できるだけ長時間活動したいと考えがちだが、早朝や夕方以降の活動は、現地の方々の生活を乱すことになる。
- (4) 昼休みを十分に取り、途中の短時間の休憩も取ることでオーバーワークを防ぐことも大切である。ボランティアが体調を崩すと、ボランティア仲間や現地の方々に迷惑をかけてしまうという最悪の事態になる。それだけは避けなければならない。
- (5) 被災者の方々の、問わず語りのお話には、耳を傾けて欲しい。自分の被災体験を誰かに聞いてもらいたいが、それを言う機会がなかった人も多い。きちんと聞いて、「お話をしてくださってありがとうございます」「そのお話を、帰ってみんなに伝えていきます」といった言葉を返して欲しい。
- (6) 被災地の方々からボランティア活動に対して「ありがとう」の言葉をかけていただくことがある。きちんと返事を返して欲しい。
- (7) とくとき、被災された方が、ボランティアにお茶を出してくださることもある。気持ちよく頂いて、丁寧にお礼を述べる。ただし、高価なものが出されたときは、先生に相談すること。
- (8) ボランティアの何気ない言葉が被災者の気持ちを傷つけることがある。常に被災者の立場や気持ちを考えて行動して欲しい。
- (9) 写真撮影は、帰ってからの報告や発表用など、必要最小限に。「帰ってから報告に使いたいの、撮影してもいいですか」という断りが必要である。
- (10) 活動中に気になることがあれば、手帳にメモするとよい。その日のボランティア終了時にボランティアセンターに報告すると、翌日以降の活動に生かされていく。また自分たちの反省会でも、気づいたことを報告することが必要である。



高校生防災リーダー学習会

（県立舞子高等学校「事前学習資料」より一部抜粋）

3. 兵庫県の高校生が取り組む災害ボランティア

兵庫県の高校生は、これまでにいろいろな災害ボランティア活動に取り組んできました。特に2011（平成23）年に起こった東日本大震災以降、継続して被災地に対して多くの支援活動を行っています。被災地で求められていることは何でしょうか。兵庫県の高校生が取り組んでいる活動を通して、あなたができるボランティア活動について考えてみましょう。

被災地での支援活動

東日本大震災が起きてから、「何かしたい」「何かをしなければ」という思いを全国の人々が持ち、兵庫県からも多くの高校生が被災地での支援活動を行いました。

兵庫県の高校生は、地元企業や他校から預かった支援物資を被災者の方に届けたり、泥かきやがれき撤去作業などの支援活動に取り組みました。また、被災地の方と交流したり、直接被災体験を聞かせていただいたりしました。さらに、学校で学んだ専門技術を生かして公園の整備なども行いました。被災地での支援活動とおして多くの高校生が被災地の方との交流を深め、命のかけがえのなさや共生の心の大切さを学んでいます。

[東日本大震災でのボランティア活動]

東灘高等学校



地元企業からの支援物資を配布

松陽高等学校



泥かきやがれき撤去作業
(写真提供 神戸新聞社)

西脇北高等学校



被災者の話に耳を傾ける

多可高等学校



仮設住宅での被災者との交流

被災地での公園整備活動

県立東播工業高等学校

～日頃学んでいる技術を生かした取り組み～

東播工業高等学校の生徒が、日頃学校で学んでいる工業の専門技術を生かし、荒れた丘を整備し、宮城県石巻市不動町に公園を造りました。この公園は「出会いの丘」と名づけられ、住民の憩いの場であるとともに避難所にもなります。



石巻市に公園を整備

2012年12月7日、東北地方でマグニチュード7.3の強い地震が発生し、津波警報発令時には、約100名の地域住民がこの公園に避難しました。

被災地に行けなくてもできる支援活動

被災地に行けなくてもできることはたくさんあります。大きな災害が起きると、その直後から共同募金会、日本赤十字社などが、海外での災害の場合は現地で活動するNGOなどが募金を開始します。各学校の募金活動で集めたお金は支援団体を通して被災地へ届けることもできます。

また、被災地へ直接支援に行く学校等に花やプランター等を託したり、被災地へ向けてメッセージを送ることもボランティア活動です。

舞子高等学校



募金活動

三田翔雲館高等学校



被災地へ送る自転車整備

但馬農業高等学校



復興を願うシクラメンの出荷準備

複数の学校の生徒が協力した支援活動

東日本大震災では、家庭に関する学科がある県立高等学校6校（佐用・山崎・小野工業・松陽・西脇・社）が協力し、手作りの「通園セット」を被災地の子どもたちへ送るプロジェクトを実施しました。セットの中身は、通学バッグ、コップ入れ、シューズ入れ、弁当袋、防災座布団、メッセージカードの6品で各校が1品を担当しました。

必要なものを必要としているところへ

救援物資を送るのは、被災自治体が必要なものと量を明らかにした場合に限ります。最近では、物資の支援はほとんどが企業からのものになっています。

4. できることから始めよう

災害ボランティアをするときは、被災された方々一人ひとりを尊重し、思いやりの心を持って活動しましょう。そのためには、心のケアの視点を持って活動することが大切です。

p.39の事前学習資料を見ても、その中に多くの心のケアの視点が入っていることがわかります。つまり、ボランティア活動自体が被災された方々への心のケアとなっているのです。

募金活動や心を込めて作ったものを被災地に送ることも、「決して忘れない」というメッセージを届けることとなります。また、被災地との交流を通して絆を深めることも大切です。

これまで被災地でのボランティア活動に参加した高校生の多くが、「これからもボランティア活動を続けていきたい」「被災地の方から聞いた被災体験の話を伝え続けたい」と話しています。また、学んだ教訓を生かし、自分たちの地域にも災害が来るかもしれないという意識を持って災害に備えることが大切であることに気づいた人もいます。

ボランティア活動は、あなたが社会に対して何ができるかを考える機会になります。まずは、自分ができることから始めてみましょう。